宗像
行発日一日毎
所行発　社大像宗
所務社　福岡県宗像郡玄海町田島
電話 神湊 26の甲

青少年訓育のための
宗像大社剣道部発会！

待望の剣道部結成発会式が開催された。当日午前十時地元少年約八十名のほか、志賀島「わだつみ館」の少年剣士隊二名、福岡名島公民館の少年剣士隊十二名（以上志賀町長岡慶親氏引率）も参加し、役員来賓多数参列のもとに先ず宗像大社に於て発会奉告を斎行して神明の御加護を祈念。

次いで会場を隣接田島小学校講堂に移して発会式が挙行された。

いきいきとした百余名の幼い顔が居並んだ。剣道部長から「しっかり学んで、りっぱな人になって下さい」という趣旨の挨拶があって、役員と来賓の祝辞が述べられたあと、少年代表が正面に進み出た。元気一杯の宣誓文が読み上げられる。

「わたくしたちは、宗像大社剣道部の方針のもとに、清く明るく仲よく剣道の修業にはげむことをちかいます」

万雷の拍手のうちに第一部が終了した。

いよいよ演武に移る。

先ず、宗像郡の剣道連盟支部理事長宗教教主と権宮司小野錬士との真剣による日本剣道形が披露された。

次で、志賀島、名島の少年剣士による演武が繰り広げられた。

整然たる基本訓練とかかり稽古、こだま殺陣の気合とうちひびく竹刀の音、これから稽古をはじめる地元少年の目が輝やいた。

演武終了後、神社よりお祝いのお守りと御神菓をいただき、万才を三唱して第二部終了。

以上で本日の日程の大半を終り、あとは地元少年だけで稽古其の他の打合せを行った。

式が終って帰るころ、社頭の梅がはらはらと散る中に、希望に胸をふくらませた少年たちの頬が紅潮していた。

福岡県教育推進協議会
宗像郡支部結成さる

三月十二日宗像神社清明殿において中正健全な教育の推進確立をめざして、郡内同憂の士相図り、三月十二日宗像大社の神域清明殿で、宗像郡支部が雄々しく呱々の声をあげるに至った。

この日力丸岩雄氏の進行係で午后一時開会、小沢氏の開会の挨拶、国歌唱、世話人福崎三千雄氏の経過報告、次いで有吉・藤井・尾野の三氏を議長団に選出、有吉議長の司会で支部規約の決定承認、役員として次の五氏を選任。

支部長　永島計七氏（津屋崎町）
副支部長　山口為雄氏（玄海町）
同　有吉明治氏（福間町）
同　安部徹太郎氏（宗像町）
同　福崎三千雄氏

永島郡支部長壇上に立たれ、力強い挨拶があった。

福岡地区会長井口末吉氏の代理として行吉氏挨拶、次で県会長安部長太郎氏生本会の趣旨を諄々と述べられた。

来賓として高橋教育庁宗像出張所長、中央中学校PTA会長中村助次郎氏の祝辞あり、又全国神職兼務教職員協議会長入江直美氏相提携して教育の中正健全化を強調された。県教育部長大橋氏の熱烈な挨拶あり、終って力強く大会の宣言決議を決定、祝電の披露あり、このとき支部大臣宛激励電報打電の緊急動議の提案あり、毅然として満場拍手をもって承認朗読すれば満場拍手をもって承認次で講演として武藤先生（修猷館高校）の長講一時間余の熱弁に深い感銘を与えた。

終って安部県会長の発声で、力強くアヂ唱和して無事に発会式を終了した。（安部健三）

宗像大社御用達
神祭具
装束
松島神輿製作所
京都市下京区北小路通新町西入
電話 (37) 八八六九番
振替口座京都一五八九一番

拝エルベル博士宗像大社参

フランス人でシュネーブ大学教授であるジャン・エルベル博士が去る二月十八日太宰府天満宮の西高辻宮司の案内で宗像大社に参拝した。博士は多年宗教学を研究し、特にヒンズー教の研究に関しては単に文献の究明に止らず、その教理の宗教的意義とヒンズー教徒の信仰生活の実態を探究するため、現地に出向て本質的な解明につぶさに辛酸をなめた篤学者である。

来朝の目的が、神人合一の平和的雰囲気を日本人の日常生活に与えている神社信仰の実態を学ばんとする意図によることも想察し得る。当日正午少し前、博士夫妻の車が社前に着いた。

正式参拝の希望に応じて拝殿に案内する。

その参拝態度が、真に現象的なものを感得しようとする熱意であることを察知した。日本人でも儀礼的にする玉串奉奠や、形式的にする拝礼を見て来た眼には、その敬虔な動作が異様にさえ感じられたのである。これは容易ならぬお客様と思った。事実その後の高宮案内から社務所での会談に鋭い質問の矢が饒々飛び出したのである。

当方の解説が特に日常会話と異る専門的な用語を以て飜訳しなければならぬ問題を、同行の通訳氏が苦心の仏語に訳していることが強く感ぜられた。

博士は一応記帰をはじめ幾ばくかのわが古典を研究している。

宗像大神の、皇祖の神勅による降臨の意義、沖島社宝のもつ神社信仰の歴史的意義に就いて鋭い質問を続けた。或る程度の納得が、彼の従来の研究の裏付となったように思える。

曾て外人で吾人の親しく接した神社研究家に、京都に住んで約羽織を着んで着て歩いたホンソンピ・ハチード氏があった。今後もこうした貴重をもつ外人学者が来訪するであろう。神道のもつ平和な雰囲気、或は神社と結びついた社会生活の態度を、知識的に否学究的に解明し得る心構えがなくてはならぬと痛感した。

今や西欧物質文明の行詰りが、東洋特に日本に何かを求めんとしている

（写真は高宮に向う一行）

論説　獅子の宣言

陽春三月、若人にとっては希望多き時季である。学園は毎年の如く多数の卒業生に、レッテルを貼って送り出す。均一的な学生服を思い思いの背広に着替える姿の変化は、そのまま個人の身上の種々雑多な人生行路への転移発足の姿でもある。この発足点は何人にとっても極めて重大である。

今年は就職難という言葉が聞かれないほど求人が多く、新卒に失業者はあるまい。好調と云っても、この頃まで に漸く分相応の橋子に喰いついて先ず目出たしの結着が見られる。然し実社会の採点は学校の点取勉強が作った成績とは違う。誤算をしてはならない。

実社会の出発点に立った時、何を掴むべきか、その腹構えに重大な転機がある。実社会がける成績判定の尺度は、先生が持っているのではない。自分自身だ。

強の光の合唱に送られて手にする卒業証書は、就職の種でも嫁入道具でもない。如何なる道に自己の人生を托するか、如何なる仕事にその生命を賭して悔なきか。給料出世のの若き夢が追うなら、その膨張は人生行路の躓きを作る重い荷物である。その手にする卒業証書は落第証書。新しい学園の門出に落第証書はいらない。

ここに獅子の宣言を呈する。

一、獅子は捨身でまっしぐらに自己の道に突進する人を愛します

一、獅子は不可能とか不得要領とか不平とか不満とか云う言葉が大嫌いです。

一、獅子は積極主義の人を愛し自和足主義に立てこもって傍観的な態度の人は大嫌いです。

一、獅子は強力と忍耐力と断行力と旺盛なる精神力を持つ人を愛します。

一、希望なき死なり満足は腐敗なり

これが一幅先生主人と自称する或る実業家が掲げている獅子の宣言である。齢八十を超えて尚壮者を凌ぐ健康、文字通り不屈の信条を護持して事業の進展に生命を賭ける主人公。大学の卒業証書などは元来持ってもいないし、高い門地の出身とも聞かない。自己の所信に合わねば決して妥協もしない、八十の年輪は辛酸営肥をもって重ねられ、まさに獅子奮迅が今日の大事業を成し遂げたのである。この主人公の邸園に獅子の石像があって、その傍らの立札に誌されているのが驚々たる宣言。獅子は毎朝四時に起きて咆哮する。

面談を求めて頭上に痛棒を喰った思出は嬉しい。その性格を一言に評すれば狷介不羈と云えようが、その信条を貫く不屈の獅子の声は今尚耳に残っている。人生幾変転、貫く生きた学問に徹した人間像は不断の光を放っている。卒業証書は飾ろう資、学校の成績は出世列車の座席券と断切るの世代の功利心は、獅子の宣言を何と受取るか。そのスタートラインには希望もある危機もある。三思して後は不撓の前進あるのみ。

阿蒙少言

静かに坐して渋茶をすする老翁の額の皺を見ていると、長い人生の幾山河を踏み越えた人間の味が感じられる。嬉風沐雨の難路を語らなくともよい、坦々たる行路をのみ歩んだ人柄であろう。牛肉の味は犬でもわかるが、四畳半裡一椀の苦労は人間だけが知る。○「ナムアミダブツ早くお迎えを下さい」というも堂に坐ると仏壇に向ってこう祈る老婆が居た。いたずらな小僧が或る日仏壇の裏にかくれて老婆の口癖が終るや否や「今夜迎えに行くぞ」と言えば老婆慌てゝ「この仏様は滅多に嘘も言えない」と、この老婆も真の人間像を描いている。○年々歳々花相似たり歳々年々人同じからず、白頭翁なるすらも、紅顔児もよくその偽りでないことを知る。生きても生き足りない人間像を神仏は微笑で見守っているだろう。○死ぬ程ろ死だけで、死に悪人なしと賞め、白ければ白いでロマンスグレーと喜ばす手がある。果して生きる楽しさか悲しさか。○何でも科学的に解明出来ないと承知しない現代、花が咲き鳥が啼く現実の事象を記録以前は実証的認識がないからと、春も花もあったにおいない時間的の事象に於ける老者もあるまい。史学に於ける史実を立証する資料の選択にも、人智の及ばぬ限界がある。先程来朝したジュネーブ大学のエルベル教授は熱心に我が民族信仰を研究している。欧米の物質文化の行詰りは、今東洋の就中日本の精神文化の探究に目を向けて来たと言われる。○フランスの詩人が詠んだ、神とは何ぞや、それは彼のナイル河畔に聳え立つスフィンクスが呼ぶ答え ぬ限り、永遠に人類の解得得ぬ謎であろうと、然りとは答え ぬ者いない、掃除僧を持つて無心の行を続ける高砂の謂と聞こえる

〽青い月夜に
今鳴る鈴は
あれは恋しい
大八さまか

白雲先生はこの「稗つきくずし」が好きなご贔。ただし何かの席で酒が廻った時に限って、高い調子の所はまるでお尻からくぐもって出るような美声をはり上げる。七分三分の割合に目を落し、背中を丸めてうたうプロフィルに一種の風格があり、それでいてなかなか哀調を帯びたムードがある。

× ×

白雲先生は文字通り白髪ではあるが、漸く五十の坂を越えたばかりで、老人と呼ぶにはまだ間がある。頭は、戦後髪をのばしてみたらすっかり白くなっていたのだという。聾学の資辮があり、彼の論文を見せて貰う者は、片手で字引を引きながら読む必要がある。だが彼は、その教養については勿論、またその他のことについても自分自身のことについては実に恬淡?で、決してそれをひけらかしたり、そぶりにあらわしたりはしない。ただ、そのことが公的な性質のものである時は、正しいと判断せられることを主張して、決して下手な妥協はしない。

× ×

多分に親分的なところがあり、むかしから沢山の人の面倒を見て来た。それだけに若い人たちに慕われている。また一面、ロマンチストでもある。感激した時には傍にいる者にその表情がよくわかる。だから、精神年令からいうと若々しい所がある。にもかかわらず、ただ頭髪が白いばかりに「白雲」と自称している所が面白い。何のらいもない人だが、みずから「悲しき六十才」を以て任じている点だけが、たった一つのてらいかもしれない。

× ×

こんなことがあった。昨年の暮、白雲先生の四人男子のうち二番目の坊ちゃんが、大学の冬休みのアルバイトで某デパートのサンタクロースになった。

「伸がアルバイトしよるところを一度見て来ようか」

白雲夫妻がそこへ行ってみた。夜になってから帰って来た二男坊曰く。

「店の人達かね、今日は君のお爺さんとお母さんが来とったね、だって」

あはは、と親子六人が笑った。

白雲夫妻の胸裡に複雑なものが去来した。

× ×

一番下のおさんに小学校六年生の可愛いさかりの坊やがある。老夫妻にとってはこの末子が目に入れても痛くない程である。たまの機会に夫妻揃って歌舞伎座へ出掛けることにしている。たまたま運悪く出遭って老もつとめに出る。ところが、一緒に家を出ない、バスの停留所でもずっと離れて列に並ぶ。無論、道を一緒に歩こうとはしない。

PTA総会にも父親の方は出られない。いつか一度出席したあとでその六年生が

「今日友だちが、君のお爺さんが来よったね」

と云われたと報告して以来、専ら母君が出かけることにしている。たまたま運悪く出遭って

「おい」

と声をかけたら、すかさず

「お父さん、ていさいが悪いから知らん顔をしていておくれよ」

とたしなめられた。

白雲老の胸を一抹のわびしさが通り過ぎる。

× ×

彼の酒量はたいしたことはない。それにもかかわらず世間一般には酒豪で通っている。尤も、酒は好きではある。この間までは、何本かのビール何本かの徳利が身辺を離れたことがなかった。元来、先生の胃は丈夫ではない。胃腸薬シロンをおかずに酒をのむ、といった年月が続いた。

去年の暮、部下のすすめで半強制的に診断を受けねばならぬことになった。いやいやながら診断を受けた結果は幽門潰瘍とのことで、絶対禁酒禁煙が宣告された。医師がこのような厳しい宣告をしたのにはわけがある。白雲先生には脱腸?の前科があるからである。

数年前、これも開腹の人のすすめで弱い胃袋を治療のため入院したことがあった。毎日の診察の際、ちっとも病状のよくならないのを医師が不思議に思った。

病院のすぐ裏口の通りに呑み屋があったことに医師が気付いたのは、白雲先生が無断退院した後のことであった。

× ×

絶対禁酒禁煙宣告以来、命の惜しくなった先生は、まる三カ月程禁酒した。人に教えて貰ったといって、干柿を前にしてのんでいた。干柿は煎じつめるとブドウ糖が破壊されて残ぜが残る。まずい薬湯である。どうが感じることに先生はこれを通用している。

先生は若い時京都に住んだ。またま参禅の機会を得た。しかしなかなか考案に合格しない。そのうちに戦争に出た。再度応召するまでの間に、一度居士解除になったことがあった。早速参禅した折りに、老師から

「戦場はどうであったか」

と問われた。先生は

「いのちが惜しうなりました」

と答えた。これが居士の機縁になったという。

いま禁酒期間にあたり「なんのなんの」と思う心のうちに、曽ての「いのちが惜しうなりました」の答弁が変節している。

「一生懸命禁酒しようとしているのは、己れの精神なのか肉体なのか」

と自問自答しているうちに

「赤襷浪士らが切腹するいさぎよい場面にも、個人個人の肉体は生理的な煩悶を感じていたのではないか、そうに違いない」

と考え及んだとき、何やら救われたような気がした、という。

× ×

長いこと禁酒したおかげで、最近は酒に弱くなった。湯呑み茶碗一杯ほどで以前酔ったような気分になれる。しかも普通の人のように顔が赤くなる。これが近頃嬉しいことの一つである。やむを得ず?たまに宴会の席へ極く少量の酒をおつき合いした時に、これがたまたま口をついて出るのが例の稗つきくずしである。行雲流水の人生途上でうたう先生の眼は相変らずのムードを持っている。

まだ年令的には稗つきくずしの「悲しき六十才か」などといいながらうたい出す。紅梅の見える庭の方に今宵も

〽青い月夜に
今鳴る鈴は

と、哀調を帯びたような、いきばったような唄声が流れてゆく。

四月中祭事表

◎春季大祭
一日～三日　毎日午前十時

三日　午前十時　摂社宮地嶽神社春祭（宮司）
九日　午前十時　沖中両宮春季大祭（大島）
十五日　午前九時　高宮　月次祭　午前十時　総社　月次祭
十六日　午前十時　摂社織幡神社例祭（鐘崎）
二十九日　午前十時　天長節祭

◎末社松尾神社に神幟奉納

かねて北郷社氏組合に於て計画中の幟旗一対が、三月十九日の同社祭の日に奉納。揮毫は久保宮司。

◎大提灯奉納

朝日折込み告社平楽寺の世話により縦二尺長九尺の大提灯一対が奉納された。十四日奉告祭斎行

◎郡傷痍軍人会総会

十九日境内清明殿に於て開催。

介紹物宝

宗像社　宗大

今回は玉類を紹介致します。祭祀神宝でありますから、三種の神器即ち鏡、剣、玉類が折り重なり混合して発見されました。玉類は左の種類があります。

❶勾玉（碧、出雲、水晶、滑石製）
大きいのは長さ約七センチ位のものから、小さいものは一センチ位のものまであります
形式の古いT字頭のものも多く見られます。
❷管玉（勾玉と同石品で水晶はありません）
指位のものから、一センチ位のものまであり、長いのは一〇センチもあります。
❸ガラス玉（ほぼ丸形のみ）
色彩はいろいろあります。

右三種のものには、すべて穴があけてあって、交合に糸につないで、木にかけて神にささげたものと思われます。

玉類で一番大きいものには、滑石製の平玉があり、直径十五センチ位のものから、二ミリ位のものまであり、小さいものには全部穴があけてあります。

大形には有孔のものと、ないものとの二種があり、円形で平らなものみであります。

大体に於て小形品が精巧にできていて中形になるにつれ、たどきりとったばかりの粗雑なものが見られます。全品何れも神に奉って、国家安穏は勿論、交通安全又は健康安全を祈ったものでありましょう。

右と同じものが当宗像大社辺津宮中津宮、沖津宮の各宮からも発見されていますことは、数千年前から三宮同格の祭儀が厳重に行われたことを窺うことが出来ます。

五月廿七日の海の記念日に、神津宮現地大祭の時には特別崇敬者二百数十名の参拝者が、毎年渡島参加して厳粛な祭典が、とり行なわれています。

宗像大社を奉詠せる
今様歌詞

「歌謂黒田節」

一

皇大神の御誓ひに
天翔る中ゆ生れませし
稜の比売神三柱を
斎ひ祀れる宮処

二

其の名も著き宗像の
辺津大宮を拝みて
神山なせる高宮に
太古を偲ぶたふとさよ

三

海を渡りて大嶋の
平和の郷の神奈備に
中津の宮の千木高く
神の御稜威を仰ぐかな

四

潮の八百路の海遠み
永久にゆるがぬ神島の
沖津の宮を遙けくも
をろがみ奉るぞ畏れ

附言

この今様歌詞の作者細田穣雨先生は、和漢の造詣深く、且詩文書道の造詣深く、昨年門弟子数名と共に辺津宮中津宮に参拝され、沖津宮の神秘境を通し景仰されて歩誠の感懐を詠まれたものである。本年八十九歳の高齢、尚矍鑠として後進の指導に竭されている。名利を求めぬ先生の風格を窺う知名士やその家族は、香椎潟近きところにある先生の門をくぐり、詩歌の道ばかりでなく人間道についての教えをうけている。まさに先生の風姿は蒸父の名そのものと云いたい。宗教部にも縁故浅からぬ先生の御健康を祈り、どこへでも気軽に杖引かれての御指導の長きを希うものである。（K）

昭和卅六年度

宗像大社
予算について

去る二月四日、当天社責任役員の会合を開いて、新年度予算の審議をいたしました。

先ず、前年度と較べ新年度案は主として新年事業計画の事業費が比較増の著しい点であります。

其他、祭典、神徳賞揚、及庁費其他について、職員増加の予定で若干ずつの増になっておりますが、新事業については、近年急激に増加の一途を辿っている各種車の安全祈願が日毎にふえ、これ等駐車場の必要に迫られている次第で神社通り沿の土地改修、参道の拡張、社務所の改築等、必要に直面した事業で神社独自で出来得る、計画立案のものであります。

其他特殊な項目については、青少年育成費、社会福祉費等の新予算で、後れ馳せながら社会福祉に貢献する等の新年度予算であります。

以上のような事について色々審議説明等あり、役員の方々に御承認を得ました次第であります。

宗像大社
社務日誌抄

二月十八日　ジュネーブ大学教授ジャン・エルベール博士令夫人来社、太宰府天満宮西高辻宮司案内

二月二十日　宗像大社参籠殿解体本日を以て終了。今後新しく原町公民館として改築される。

二月二十七日　新職舎建築の為旧職舎解体、山下部落作業奉仕。京都国学院学生二行神社複祭の為来社

三月一日　月次祭斎行、地元総代神宮林奉仕行合せ。

三月三日　文部省社坂技官外三名神之島神宝の件にて来社

三月四日　役員会開催三十六年度予算審議、並に沖之島築港問題につき県庁当局説明と懇談

三月八日　宗像大社職員職舎五戸建築工事初まる。

三月九日　春季大祭の件にて職員会議開催。

三月十日　神宮林奉仕団出発

三月十二日　教育推進準備会宗像支部発会式を神湊明殿にて開催出席者二百七十人

神事解説
春祭りと農作業について

彼岸も過ぎ、いよいよ四月卯の日にはモミオロシがあって、実際の農作業が始まる。全国の神社の「田植祭り」が、時日の遅速の差こそあれ、これから段々盛んになって行く。さくらが咲き、地温も十度近くなってくると、農家はいそがしくなる。四月卯の日、また八十八夜の別れ霜の頃に初しをした苗が、微風になぶられ、山野の新緑が万物の蘇生を告げて躍く頃、日本の南から北までの到るところで田植関係の神事芸能が賑やかに行われる。

○　○

「一粒植えればこれも、二粒植えれば二千になれ」

これはカチカチ山の昔ばなしにある爺婆の唱えごとだが、農民の願いを代弁しているといってよい。この農民の希求がその生活と直結した必然性を持って、古今を通じて脈々と生き続けるものが農村の神事として伝承されている。中でも主食である米に関しては、最も重要な位置を占める神事芸能を存している事実を見逃すことはできない。

日本の集団生活は、その殆んどが農業集団であったといえる。従ってその基本的な生活が農業生活であったといって差支えない。このために、祭りも農耕との関係が最も深く、農耕の神も、御年神、倉稲魂神や氏神のほか、種々の民俗的名称を以て呼ばれる田の神々や祖先の霊等は、すべてその生産に関連して成立した神々であった、また祭る側の人々の生活上当然に求められた神々であった。

○　○

日本の神社の祭りが春秋二季の大祭に示される通り、農業中心である稲作りの祭りを主たるものとして実行されて来たのも右の理由による自然発生の現象であるといえよう。

神事は、実際の農事に伴わ前にさまざまな予祝の意味を以て行われる。春祭りは多分にこれらを総称するが、何れもが農村の共同の祈願につながる所にその意義を見出すことができる。

田の神は通常二月三月四月の間にお降りになるとされている。四月（ウツキ）は卯年後の十月（カンナツキ）と対応して農作の初発季節である。全国各地で、正月トシガミ祭りや古式祭御座の節に使用した年占のカユカキ棒や餅、御幣、神社の絵馬の显串を田間の傍の地神や、また苗代の水口に立ててミトサマ等といって神のヨリシロとしてまつる例がある（信濃）。その際、焼米、タネマキガユ、カマメシ供えて一日を楽しむ（信濃）とか、春田打の時や六月一日に、正月祭の直会（うちあげ）の意味で餅、餅を食べる地方（津軽、九州）もある。

○　○

卯月八日、八十八夜等に花を飾って献詠式を行う風習が又これに類する。越後、上野、常陸、秋田、京都、和泉、中国、四国、阿蘇、鹿児島等にある。京都で此の花を花瓶に挿す。これが今日の生け花（華道）の起りである。

花祭りは、今では灌仏と関連しているが、元来は此の日に神前に春の花をかざし山アソビ、磯アソビをして社日をつつしむ風習であった。

五月をサツキというのは、サという語音は早苗の早、又、先、尖の意味があって、わが国の二大神祭の始めの祭の日を意味するものであろう。稲の播種期は同一地域でも必ずしも同一ではないが、種籾を下ろしてから三十日、又は三十三日で初苗を植え、これをナエビラキ、サンジュウサンビラキ、サンバイオロシ、又は単にサビラキ日と称して三束の苗を植え（羽後）同時に泥打ちして祝儀をする。古くは津軽候が泥打ちをした故事がある。此の日に田の神に供物をする例が多い。羽後の小豆汁、京都附近のサビラキのお供え、四国のサイケの実のなる木、淡路のカンキ、静岡のサオリの小豆飯、海草などがこれである。これら一連の水口祭、苗代祭の行事には夫々地方色豊かな田植神事が行われ、さまざまの芸能が伴随しているものも多い。

○　○

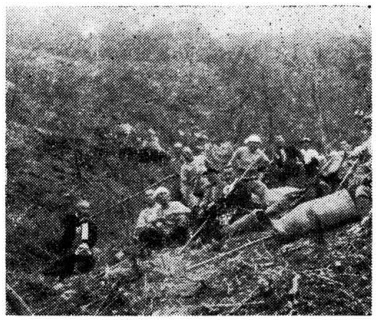
日本三田植祭といわれるものには、福島県の伊佐須美神社、大阪の住吉神社、伊勢の伊雑宮のそれがある。神社のお田植神事は、それに附随する歌舞音楽をも含めた田植神事で、田の神々に捧げて当年の豊作を祈願する姿である。サンバイ、ドーガシラ、タチウド、トーローサン等の名で呼ばれる主宰者（代掻者）は故事に通じ田植歌をよくそらんずる者である。当日の奉仕者をサオトメ、ハナムスメといい、サツキ様（忌籠）を用いる。こうして協同作業者らの心と服装とを統一して行事を進行するわけである。田遊び芸能の中には、慰と嬉その他が相抱擁して舞う所作をともなう例も多い。何れも生成、発殖、長寿を願う態を表現するものといってよい。

○　○

田植えが終ると、サの神は田から送り出される。サはノボルため、サノボリ、サナブリ、又はシロミテと称して氏神にこもり、正月の年本を以て焚きつけた直会を盛大に営んで飲食する風習が全国的に行われている。今は唯の飲み食いの日としている所が多いが、元は右の様に厳重な意味があったことを忘れてはならない。（M）

（田植芸能は来月号）

お伊勢さまの植樹を奉仕して



去年の伊勢湾台風は神宮神域にも甚大なる被害を及ぼし、ウッソウと繁っていた大木も殆んど倒れてしまいました。これがため神宮司庁をはじめ大日本山林会等で将来の御造営用材とすべく植樹に着手されました。

かねて一月号に発表の通り、当氏子会に於て神宮奉仕のことを話し合っていましたところ、たまたま山林会の野尻さんという方が当社に参拝され折、いろいろと植林の話が出て、それが今回の植林奉仕の発端になったのであります。

奉仕団員十五名（団長吉武儀一郎、力丸甫尾、嶺本平、花田安市、小沢深、樋口六平、井上倉吉、宮本英助、嶺正雄、力丸竹雄、福崎恒雄、吉武俊次、清水定夫、庄村喜右衛門、付添福宜神戸幸夫）

三月十日氏神様に奉告祭をすませ、午後出発、十一日到着、直ちに神宮の指揮に入り、野尻氏の御案内で両宮参拝。特に破格の御垣内の参拝を許されたことは一生の感激でした。次で神宮徴古館農業館を拝観。終って午後二時貸切バスで植樹現場に向いました。

現場は内宮から三里半の山奥で、濱谷沿いに右折左折約一時間余、その日は一同早目に就寝。翌朝より五日間の作業開始。午前六時起床、七時朝食、作業場へ出発。四十分後現場到着、係員の指示のもとに植樹奉仕。急傾斜面で一同の緊張高まる。午後四時半終了。

一人の植樹数はおおよそ一日七十本位のところ、田島の綾代さんたちは一日百五十本も植えました。九州男児の面目躍如。一同の喜ぶこと。

相当の作業量でしたが、一人の事故者もなく奉仕終了。これひとえに大神宮さま並びに宗像さまのお蔭と、帰郷後直ちに一無事終了奉告祭」を斎行した次第です。又の機会に、この有意義な御奉仕を、心ある後進の若人によって続行されることを心から祈ってやみません。ここに生涯の思い出をするしく報告といたします。

（神戸）

全国宗像会の結成に就いて

宗像誌の発行に関連して、最近、戦前まで存続していた全国的な組織を復活しようとの声が起って来た誠に喜ばしいことである。以下二篇の投稿を掲載して御参考に供する。

終戦以来既に十五年色々の点で便利にはなりましたが、世相はあらゆる面に角つき合せ、争に日も足らざる有様。親と子はしっくり合わない、老人と壮年もうまくゆかない、隣近所のつき合いはいよいよ親密感からすれて来ました。犯罪行為は一般に深悪となり殊に青少年の犯罪の増加は驚くばかりで、その将来が空おそろしく案ぜられます。この暗い気持を一掃してうるおいと温かい味ある日を一日も早く迎えたいのであります。現在お宮寄は遺憾ない断切れないものを、子を持つ親の方々は不安と焦慮を、具眼の士は深憂を夫々胸中にお持ちではないでしょうか。又青少年諸君は世相に満足ではないでしょう。国の当局はその対策に随分苦労の様子でありますが、一向によくなるようには見受けられませぬ。私達宗像郡出身のものはこの現状を深く反省し、お互に力を合せ是正の道に協力することが楽しい明るい生活を築く道と痛感するのであります。

そこで先ず私達在郷の者一同堅く手を握り是正の道に協力すべき母体を確立し、これを全国に散在する同郷の人々に拡大して一大助け合い運動を展開して御互の生活が明るく楽しくなるよう努力し、悠久の昔より連綿として続ける神都の名に相応しい住みよい繁栄の郷土にしたいと只管念願し、茲に同志の者相謀り全国宗像会（会名は後日幹議）を結成せんとするのであります。

全国宗像会の結成を望む

今三号を手にして思うことがある。この会報がどんなにして、刊行されているかお詳しくわからないが、初号に見る宗像神社宮司の所見からしても、宗像を郷土とするもの、親睦共栄を目的とする連絡機関であることは間違いないと思う。それならこの宗像人――郷土に在ると他郷に住むとを問わず――の機関紙たる背後の組織が考えられる。各地に地方別宗像会が機関として育成してゆこうではありませんか。

八幡S

梅ほころぶ

宗像大社社頭の紅梅がさかりの頃、或る大安の日、うらうらな陽光の下を神前結婚式を終えた花嫁さんが静かな歩を運んでいたふと彼女が立ち止って紅梅を仰ぐ。みどり深い雁土の森の中に、折りから香り高く咲きほこる梅花と純白のドレスをまとった花嫁さんとの対照的な美しさ。

新たな人生の門出に、神前の梅を愛する彼女の心の中にはどんな感慨が秘められているであろうか。

去る一月二十一日、宗像大社社務所に於て第一回準備委員会が開かれ、当郡にゆかりある万葉歌の歌碑を建立しようということになった。左に趣意書をかかげる。

宗像郡万葉歌碑建立趣意書

わが郷土宗像は神郡と呼ばれ、いわゆる神代からの由緒を誇っている土地柄であります。この地が古来歴史上の重要地であったことは郡内至る処に散在する貴な旧蹟によって周知のところであります。さらにこの地が海と陸神社の境内に万葉歌碑建立を思い立った次第であります。

そもそも万葉集は遠い奈良時代に成立した我が国最大の歌集でありまして、その文化史的価値の数々は、千年余りを隔てた私どもといたしましては、これら万葉歌碑建設につい

万葉歌碑建設について

相謀り、全郡の総氏神である宗像神社の境内に万葉歌碑を建立することも故あるかなと思われます。

今ここに、数多い文化遺産の中から、特に万葉集中の秀歌を選び石に刻んで、宗像万葉歌碑として神郡の象徴である宗像神社の神域に建立することは、誠に可能でした。沿道の風物の一つとして万葉人の風雅の対象になることも故あるかなと思われます。

万葉集の中に見える郷土の地名の歌は、古事記・日本書紀などと共にわが国古代における最高の位置をしめるものであります。

上は天皇から下は野人、若菜摘みの乙女に至るまでの、四千五百余首の和歌を集めて萬世に伝われ、各界の人々の祈りをこめた古代の風雅の言葉は、世界に比類を見ない歌集であり、或いは歌の範として愛唱されて来ているのでございます。

つきましては此の度、郷土有志相謀り、全郡の総氏神である宗像神社の境内に万葉歌碑建立を思い立った次第であります。

そもそも万葉集は遠い奈良時代に成立した我が国最大の歌集でありまして、その文化史的価値の数々は、千年余りを隔てた私どもといたしましては、これら万葉歌碑建設につい

昭和三十六年三月　日

発起人　渡辺　要　桜井成美　永島寛之助　永島計七　森　政教　麦野時雄　庄村喜右エ門　桜井　秀　吉武儀一郎　永島範一　伊規須ゆき　立石　昇　高山徳七郎　伊豆ときえ

町村往来

海山の幸

（ふるさとの味）

小春日和つづく頃となると、特有の香をもつ松露（しょうろ）が海辺に近い小松山に沢山できる。

子供等が竹籠を手にさげて、思いくのあしどであさっている姿がみられる。

収穫された松露は、早速夕の膳に吸物等に使用される。何とも云えぬ上味です。

○　○

磯釣ではどうさと云う魚が石垣の穴をねらえば、四五尾は同じ穴で釣れる。

必ず大形から、次々に釣れて小形になるのが面白い。この魚は年中釣れるのが特徴で、味噌汁でたべる味は又格別。

桜の花咲く頃、あぶらめ（魚名）が良く釣れるようになり、宗像の磯辺は釣天狗で賑いを呈する。

近年は北九州、博多方面より家族づれで一日の休を有効に楽しむ緊張裡が見受けられる。

日中のお昼頃は彼方此方にカゲの祖先の尊い遺業をまのあたりに眺め、その厳粛するものを深く味わって古人の大らかな温かい心に親しく触れ得ることの感慨を喜ぶと同時に、これらの貴重な文化的遺産を整理し顕彰して、これを後代に温存を計ることこそ、私共にとって誠に神聖な責務であると痛感するものでございます。

日中のお昼頃は彼方此方にカゲ

○　○

磯釣ではどうさと云う魚が石垣の穴をねらえば、四五尾は同じ穴で釣れる。

必ず大形から、次々に釣れて小形になるのが面白い。この魚は年中釣れるのが特徴で、味噌汁でたべる味は又格別。

桜の花咲く頃、あぶらめ（魚名）が良く釣れるようになり、宗像の磯辺は釣天狗で賑いを呈する。

近年は北九州、博多方面より家族づれで一日の休を有効に楽しむ緊張裡が見受けられる。

▼…昨年秋から工事にかかっていた福間中央体育館が近く完工、十五日落成式を行う鉄筋コンクリート、延べ九百十三平方米、中二階式の観覧席があり講堂としても使える。総工費四百七十万円。

▼…福間町向山に建設する九州変圧器KKの地鎮祭は三日午前十時から現地で行う。

▼…宗像町公民館は十日午後二時から中央公民館で成人講座を開く講師はNHK福岡放送局放送部長園児昌治氏。

▼…西鉄バス赤間営業所は宗像町東郷の県道工事のため九日から十五日まで原町線東郷南口―東郷駅間を運休、東郷南口まで折返し運転する。

▼…宗像町新生活発表会は十四日午前十時から東郷小で開く。発表者は石松智子さん（吉武）安部須美子さん（赤間）花田静香さん（河東）高宮静子さん（南郷）小園しづえさん（東郷）の五人。

▼…宗像町同和教育研究会は十四日午後三時半から公民館で開く。福岡商業高校林教諭をかこみ懇談する。

▼…赤間町教委は三月一日委員会を開き三十六年度の教育予算を打ち合わせた。

▼…三日県社会教育会館で開く新生活運動発表大会に郡から福間町手光婦人学級大庭ふじ子さん、宗像町須恵分館長田野新兵衛さんが出席、体験談を発表。

▼…郡四H クラブは三日役員会を開き、来る二十四日先進地視察として福岡市周辺のブドウ栽培を見学することにした。

▼…津屋崎青年研修所の研修生五人は十四日貸切バスで三井郡小郡町の県種畜場を訪れ、見学。

▼…宗像署古代派出所前県養行巡査はこのほど地元の士六地区から「子供たちの登校によく世話をやいてくれる」との理由で表彰され金一封を贈られた。

▼…宗像町東郷町婦人会総会は九日朝十時から宗像農用組合会議室で開き予算、事業計画、役員承認など審議する。

▼…郡東部地区四Hクラブ連絡協議会総会は十五日朝十時から県農試内で開き新年度事業計画の打ち合わせと役員改選を行う。

▼…春日農協光茂支所はこのほど農協貯蓄が一億円達成にこぎつけたので二十一日朝十時から同支所で祝賀記念大会を開く。

▼…郡傷痍軍人総会は十九日朝十時から宗像大社清明殿で開き予算事業計画など審議。

▼…福間町福間校区戦没者慰霊祭を十八日朝十時大善寺にて開催。

毎日新聞より転載

宗像伝説　其の三

無風流夢譚

むかし、宗像郡は横山の里に彦六という律義一辺の働き者がおりました。信心深い人で一生懸命働いていました。

○　○

ある年、氏神さまの春祭りに、あちこちの振舞い酒にすっかり御機嫌になった彦六は、我が家へ帰る道すがら、どこをどうして歩いたか皆目わからなくなって寝込んでしまいました。

近所の若い衆がこれを見ていてずるい心を起しました。みんなで彦六を最寄の墓地に運びこんで坐った恰好に据えつけ、倒れないようにと突っかい棒をして、その前にそのあたりの花瓶や線香立てなどを持って来て、まるで新墓のようにしつらえました。

春とはいえど山つきの、夜更しお寒うして、ふと目をさます彦六が、あたりを見れば此の有様、はあこれまた何としてわしはこうっきり死んだらしい。これでは家にも帰れまい、酒をくろうて死んだゆえ、地獄へなり極楽へなりと行きつく先のこと、行く手ふらねど行ってみようかい。

ふらふらと立ち上った彦六は夢うつつのうちに地蔵峠を越えとほとほと歩いて行きました。遠賀郡の岡垣から遠賀川の川筋あたりまで行くと、夜はすっかり明けて、あちこちに野良仕事をしている人影が見えます。中には楽しそうに歌を唄っている人もありまして、はあ、ここが極楽かな、と思いながらどんく歩いて行くと、今度は向うの方に一軒の瓦焼屋があります。大の男等が顔を真赤にして竈の火を焚いています。

はあこれは地獄の竈だきかな、と思った彦六がその男たちに尋ねました。

「あんた達は地獄の赤鬼さまかいっ」

隣りに寝ていた妻君が飛び上りました。彦六は、今度こそ本当に目がさめました。

「お前さん、寝ほけているんじゃないかと。ここはたしかに此の世ですぱい。このうらうらな春の日に、あんたどこから浮かれて来なすった」

「ほう、では、ここはあの世ではないとですな」

ここではじめて彦六は夢からさめたような気がしました。

彦六はそこで働くことにしました。「あーりがたや、ありがたや、生きていたとはありがたや、しっかり仕事に打ち込んで、お金を沢山溜めこんで、故郷に錦を飾りましょう」と決心して、迷いの夢を吹き払い、根が正直の彦六は一心不乱に働きました。

何年か経ました彦六の懐には沢山の金が溜りました。そろそろ故郷の恋しくなった彼は、或る日主人に暇を乞うて、横山の里を指して出発しました。

○　○

一方、彦六の家の方では、あれ以来行方不明になった彦六を毎日毎日探しました。猛が来、正月が来てもとうとう見つかりません。仕方がないので氏神さまの春祭の日を主人の命日と定めてねんごろにとむらっておりました。月日はどんな悲しいことでも解決してれます。妻君も今はすっかりあきらめていました。そこへひょっこりと主人が帰って来たものですから、家の者はこれは夢ではないかと驚きました。いちぶ始終を聞いてみて、これ迄の心配が一ぺんに喜びに変り、お祝いをすることになりました。先ず氏神さまにお礼参りをすませ、次いで御先祖さまに報告のお参りに行きました。

長いこと御無沙汰をしておわびに、沢山のお供え物をして、墓石の苔やまわりの草をむしりにかかりました。なかなか抜けません。思い切り引きむしりました。

「いたいっ」

(二)誕生日

今日は小学生組は算数の勉強日。学校の宿題は「自分の年齢を計算せよ。」というのである。思い思いに、自分の年齢計算に一生懸命。今年數え年で、満何歳ということに教えられているので児童達の年齢呼称も満何歳ですと答を提出する。計算の正否をしらべた際、偶然にも小学生二人の女の子が日時は違うが生れた月は両人とも三月であった。勉強終了後、この二人の誕生祝を明日の日曜日に行うことを学童一同に提案した。

K生（高校一年）D生（中学一年）の両生が「先生、僕も三月生れですよ。」といかにも明日の誕生祝にあやかりたい面持である。「では、三月に生れた四人の誕生祝いをしましょう。いや生れた月日は違うが、明日は皆さんの誕生祝いをすることにしましょう。」一同「賛成、賛成、先生お願いします。」「明日の誕生祝いは午前十時に始めますから、いつものとうり、その五分前に集まることにします。皆さんの誕生を御祝いするので、クリストの誕生日を祝うのでないから、サンタクロースはいません。然し先生がサンタクロースに代って、皆さんに誕生祝いの御饅頭を走しますから、十時五分前に必ず集まりましょう。」「グッドバアイ。」「グッドバイ。」

◇

三月の初め、老人にも相当凌ぎ易い季候になったものの、昨日来の北風で矢張り冷たい。いつもの通り、こたつの中にちゞこまっていると中学一年のD生が「グッドモーニングサー」と挨拶の声も元気よく、午前九時半に、もう勉強室に這入って来た。それから、つゞいて、学童達はいづれも楽しそうな面持で集まって来た。最後は田舎から約三十分間電車に乗って来たK生であった。今日は全員十二名の同時出席。いつもの勉強室では狭すぎる。そこで、十畳の応接間を祝場に当てた。祝場の中央には四尺四面の飛板の卓。勉強室ではしゃいでいた学童達は、この祝場に案内され、卓の周囲に着席すると、子供心にも今日はお祝いという意識を感じたのか、それとも勉強室との雰囲気の様相が異っているのに心を奪われたのか、無駄口一つださず御行儀よくかわっている。

「今から、皆さんのお誕生をお祝いしますから、皆さんと一緒に『おめでとう』を三唱しましょう。『おめでとう、おめでとう、おめでとう。』「さて、皆さん、誕生はなぜおめでたいのでしょうか。なぜ誕生をお祝いするのでしょうか。」D生。「それはその人が生れたことがおめでたいからお祝いするのです。」

K生。「僕の考えは生れたことがおめでたいに違いないが、ただ生れたこと丈がおめでたいというのでお祝いするのでない。若しそうだとすれば、毎年誕生をお祝いする必要はないと思います。毎年お祝いするのは母その人が立派に成長したのをお祝いするのだと思います。」

「D生、K生、両君の考えはどちらも正しい。生れたことをお祝いするのは当然だが、毎年お祝いするのは、その人が毎年立派に成長したことを御祝いするのです。又これからも、毎年今までのように、立派に成長し、末永く生きていることを祈願するものです。つまり、人の誕生をお祝いする意義は、その人の誕生してより毎年立派に成長したことを祝い、且これから先も過去のように末永く立派に成長し安楽に生きていくようお祈りするのです。さあ、皆さん、これから、今日の御馳走を頂いて、皆さんの今日までの成長を祝い、且これからも立派に成長することをお祈りしましょう。」児童達は自己の将来の成長を祈願する心の動きで、瞬時黙祷の雰囲気がたゞよった。間もなく児童達は汁粉の菓子などに、満足感を顔色に湛え、心は明るく、いつものように、はしゃぎはじめ、祝場は忽ち子供の世界の雰囲気一色に塗りつぶされてしまった。

◇

K生。「おい今先生が立派に成長したのか。病気したものはなかったか。学校をサボった者はなかったか。」D生。「僕は風邪で三日休んだきりだ。」

H生。「私は腹をこわして一週間学校を休みました。」T生。「僕は少し怪我したけれど、学校は一日も休まなかったよ。」D生。「T君はえらそうなこといっているが怪我したときはお母さんに、学校に一緒にいってもらったんじゃないか。」議論続出。お祝い気分を通り越し、優越感の発表会の様相を呈して来た。そこで、老爺も仲間入りして更に議題を提供した。「皆さんの意見の中に忘れていることがあります。そのことについて皆さんの意見を聞きたい。それは今日まで立派に皆さんが成長して来たのは皆さんが自分で立派に成長したのでしょうか。」

K生。「それは自分の行動にも因りましたけれど何といっても、父や母に養育されたことが根本だと思います。」D生。「その通りだと思います。僕が怪我したときでもお母さん一生懸命で貰ってくれたから学校にいけなかったのも知れません。」H生。「私もお腹をわるくしたときお母さんから、一週間も看病して貰いました。」「皆さんが今日のように立派に成長し、立派な意見をいわれるようになったのは勿論皆さんの努力もありますが、お父さんやお母さんが皆さんを立派に成長させようと、一生懸命に苦労してくださった御陰であったことを忘れてはなりません。昔の人がこんな歌を詠んで私達にえらくなる道を教えています。

『子を思う親はお親思ひは世にすぐれたる人となりなむ。』この歌の意味は親の子が立派に成長し立派な人になれと、年中明けても暮れても思いつづけて、病気や怪我のときのことばかりでなく、衣食のことから学校のことやお行儀のことまで、一生懸命に皆骨折っていられるのです。このように、親が子を思っている程子として親のことを思うような人であれば世の中においてほんとうにすぐれたえらい人になることが出来るというので す。皆さんこの歌のように、お父さんや、お母さんの苦労のことを常に思って将来的中で、すぐれたえらい人になりましょう。常に親の苦労を思うということは、親に対し感謝することです。いつも唱する五省の中の感謝に欠くることなかときかと反省するのはこのことであります。又五省の第一は『互助に悖るなきか』でしょう。皆さんはお互に助け合っていますか。」

D生。「はい僕はいつでも勉強のことで、お友達に教えたり、教わったりして助け合っています」

H生。「私は学校の行き帰りもお友達と伴よく一緒に助け合っています。」

A生。「私はお母さんからお菓子を頂いたときは妹にわけてやっています。」

「皆さんはほんとうによく助け合っていますね。この中で誰かお父さんやお母さんを助けた方がありますか。」

◇

会場は一瞬静寂な童一同沈黙答えるものなし、やゝしばらくして、

D生。「僕はまだ小さいからお父さんやお母さんを助けることはむつかしいです。大人になったら大いに助けようと思っています。」

K生。「僕も学校を卒業し就職したら、両親を大いに助けるつもりです。」

一同。「はい、よくわかりました。今日から一生懸命にいたします。」

◇

折から今日の誕生祝の赤飯とお菜が運び込まれた。一同は之に舌鼓をうたせ、緊張した気分から解放され、再び賑やかな雰囲気が部屋一ぱい漲った。

K生。「おい皆今日は誕生祝いで愉快だが、日本の国何時生れたか、日本の誕生日を知っているか。」D。「クリストの生れたのは千九百六十一年前ということは教わって知っているが、日本の国が何時出来たかということはまだ一度も聞いたことがないよ。」

K生。「僕の所で二月十一日に日本の建国記念日を祝う行事がありましたが、そのとき部落の大人達の間に色々の議論があったのを聞きました。その議論の要点は『日本の国の肇めは二千六百二十一年前の神武天皇の時でなく、実際はそれよりも六百年もあとのことだから、神武天皇のときに肇まったとする建国記念日の行事は無意味であるというのでした。一体いつ肇まったのでしょうか。いつ生れたかもわからないのに、記念日としてお祝いすべきものでしょうか。』

「今日は皆さんの誕生のお祝いをしましたね。皆さんの生れた月日は夫々違いないことでしょう。前にお話したように、私達の誕生日にお祝いするのでなく、生れてから今日まで立派に成長したことをお祝いするのであり、又これからも立派に成長することを祈願するのであります。国家も同様です。日本の国が肇まった、即ち日本の国が誕生したのが二千六百年前か二千年前かは書物で伝える歴史の本がないから、はっきりわからないが、いづれにしても、日本が誕生したことは間違いないことです。そして長い月日の間に日本が立派に成長して来たことも確かです。だから、日本の成長したことをお祝いするのは無意味だというのはおかしいでしょう。誕生日を祝うのではなく、誕生日に立派に成長したことをお祝するのであります。」

◇

「今皆さんがまだ小さいから大人になったら親を助けることが出来るとのことですが、小さい時でも親を十分助けることは出来るのです。いや、今日からすぐ両親を助けられるのです。両親はあなた方を立派な人に成長させようと色々骨折っていられるのはあなた方の成長に対してあるのはあなた方のためを助けてくれるのです。あなた方が両親を助けられたなら、両親はあなた方はお互に助け合うわけです。これが日本の建国記念日を祝う行事がありましたが、そのとき部落の大人達の間に色々の議論があったのを聞きました。その議論の要点は『日本の国の肇めは二千六百二十一年前の神武天皇の時でなく、実際はそれよりも六百年もあとのことだから、神武天皇のときに肇まったとする建国記念日の行事は無意味であるというのでした。一体いつ肇まったのでしょうか。いつ生れたかもわからないのに、記念日としてお祝いすべきものでしょうか。』

「今日は皆さんの誕生のお祝いをしましたね。皆さんの生れた月日は夫々違いないことでしょう。前にお話したように、私達の誕生日にお祝いするのでなく、生れてから今日まで立派に成長したことをお祝いするのであり、又これからも立派に成長することを祈願するのであります。国家も同様です。日本の国が肇まった、即ち日本の国が誕生したのが二千六百年前か二千年前かは書物で伝える歴史の本がないから、はっきりわからないが、いづれにしても、日本が誕生したことは間違いないことです。そして長い月日の間に日本が立派に成長して来たことも確かです。だから、日本の成長したことをお祝いするのは無意味だというのはおかしいでしょう。誕生日を祝うのではなく、誕生日に立派に成長したことをお祝するのであります。」

◇

一同。「はい、よくわかりました。今日から一生懸命にいたします。」

◇

折から今日の誕生祝の赤飯とお菜が運び込まれた。一同は之に舌鼓をうたせ、緊張した気分から解放され、再び賑やかな雰囲気が部屋一ぱい漲った。

K生。「おい皆今日は誕生祝いで愉快だが、日本の国何時生れたか、日本の誕生日を知っているか。」D。「クリストの生れたのは千九百六十一年前ということは教わって知っているが、日本の国が何時出来たかということはまだ一度も聞いたことがないよ。」

K生。「僕の所で二月十一日に日本の建国記念日を祝う行事がありましたが、そのとき部落の大人達の間に色々の議論があったのを聞きました。その議論の要点は『日本の国の肇めは二千六百二十一年前の神武天皇の時でなく、実際はそれよりも六百年もあとのことだから、神武天皇のときに肇まったとする建国記念日の行事は無意味であるというのでした。一体いつ肇まったのでしょうか。いつ生れたかもわからないのに、記念日としてお祝いすべきものでしょうか。』

「今日は皆さんの誕生のお祝いをしましたね。皆さんの生れた月日は夫々違いないことでしょう。前にお話したように、私達の誕生日にお祝いするのでなく、生れてから今日まで立派に成長したことをお祝いするのであり、又これからも立派に成長することを祈願するのであります。国家も同様です。日本の国が肇まった、即ち日本の国が誕生したのが二千六百年前か二千年前かは書物で伝える歴史の本がないから、はっきりわからないが、いづれにしても、日本が誕生したことは間違いないことです。そして長い月日の間に日本が立派に成長して来たことも確かです。だから、日本の成長したことをお祝いするのは無意味だというのはおかしいでしょう。誕生日を祝うのではなく、誕生日に立派に成長したことをお祝するのであります。」

◇

一同。「はい、よくわかりました。今日から一生懸命にいたします。」

◇

折から今日の誕生祝の赤飯とお菜が運び込まれた。一同は之に舌鼓をうたせ、緊張した気分から解放され、再び賑やかな雰囲気が部屋一ぱい漲った。

K生。「おい皆今日は誕生祝いで愉快だが、日本の国何時生れたか、日本の誕生日を知っているか。」D。「クリストの生れたのは千九百六十一年前ということは教わって知っているが、日本の国が何時出来たかということはまだ一度も聞いたことがないよ。」

K生。「僕の所で二月十一日に日本の建国記念日を祝う行事がありましたが、そのとき部落の大人達の間に色々の議論があったのを聞きました。その議論の要点は『日本の国の肇めは二千六百二十一年前の神武天皇の時でなく、実際はそれよりも六百年もあとのことだから、神武天皇のときに肇まったとする建国記念日の行事は無意味であるというのでした。一体いつ肇まったのでしょうか。いつ生

仰陽僑居童問
みんなの誕生日

超喜叟　出光萬兵衛